

玉泉館旧蔵の加曽利貝塚縄文土器資料：玉泉館旧蔵 資料の研究Ⅱ

福永，将大
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/6777060>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．20，pp.31-48，2023-03-31．The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：



玉泉館旧蔵の加曽利貝塚縄文土器資料

—— 玉泉館旧蔵資料の研究 II ——

福永 将大

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵資料のうち、千葉県千葉市に所在する加曽利貝塚から出土した土器資料について報告した。加曽利貝塚は主たる時期の異なる二つの大規模貝層（北貝塚・南貝塚）によって構成されている。当該土器資料を検討した結果、加曽利貝塚の中でも主に縄文時代中期後半の加曽利E式期に貝層が形成された北貝塚で出土あるいは採集されたものである可能性を指摘した。

キーワード：玉泉館旧蔵資料、資料報告、加曽利貝塚、土器、縄文時代

1. はじめに

玉泉館旧蔵資料は、旧制福岡高等学校教授の玉泉大梁氏が収集した資料である（小林1988、谷澤・岩永2021、玉泉1966・1972）。資料数は5,000点を超過しており、そのデータベースは九州大学総合研究博物館のウェブページにて公開されている¹。これらの資料の一部に関しては、既に論文や著作の中で紹介・報告されているが（飯塚・主税2021、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996・1997・1999、谷澤・岩永2021など）、大部分の資料は、詳細が未報告のままである。

筆者は、2022年に「玉泉館旧蔵資料の研究」と題して、福岡県みやま市に所在する下楠田貝塚出土資料の報告を行ったことがある（福永2022）。その際に、まだ目の目を見ていない資料が数多く存在していることを改めて認識し、引き続き、玉泉館旧蔵資料の調査・研究、そして、その成果の報告という営みを継続していくことの必要性和重要性を痛感した。

本稿では、玉泉館旧蔵資料のうち、千葉県千葉市に所在する加曽利貝塚の土器資料について報告する。加曽利貝塚は日本考古学史上で著名、かつ、重要な遺跡であり、2017年には国の特別史跡に指定されている。後述するように、56点の土器資料が玉泉館旧蔵資料として九州大学総合研究博物館に収蔵されている。玉泉館旧蔵の縄文時

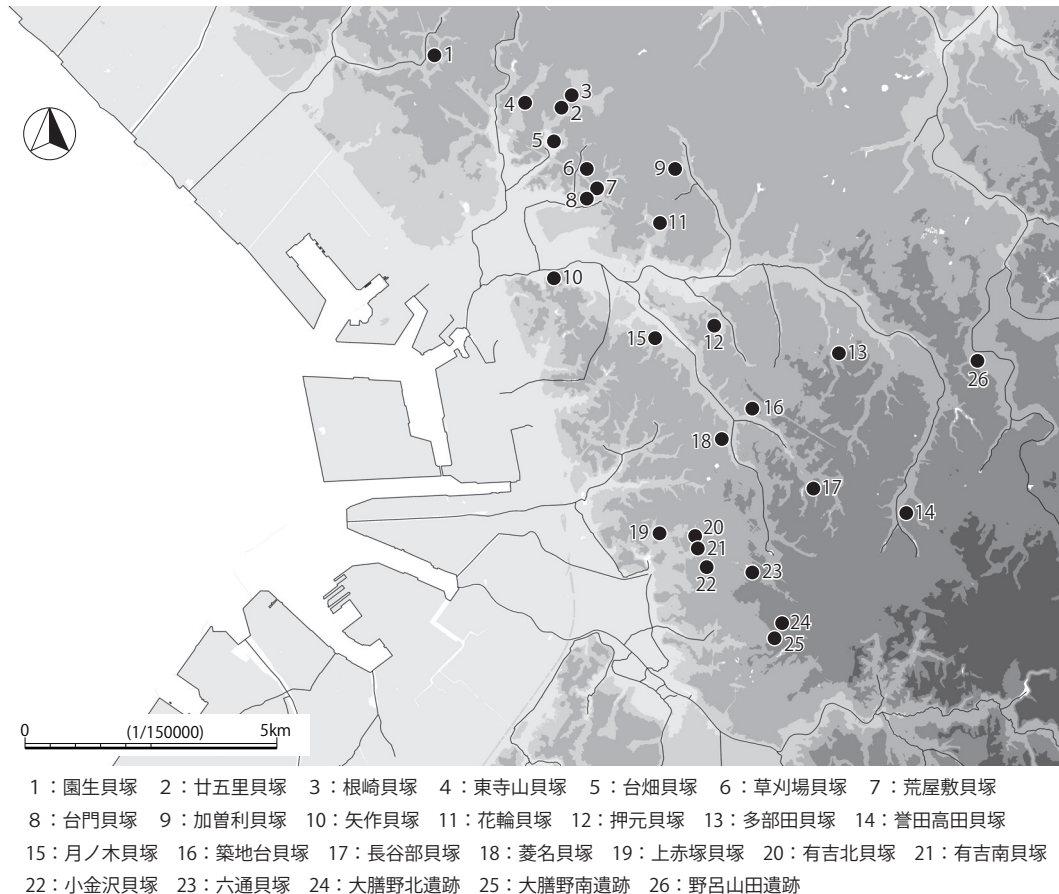
代資料としては比較的まとまった資料数が収蔵されており、その学史的な重要性を鑑みて、当該資料の報告を行うこととした。

2. 加曽利貝塚について

加曽利貝塚は、千葉県千葉市若葉区桜木2～8丁目に所在する、東京湾東岸における最大規模の貝塚である。千葉市内最大の流域面積をもつ都川に注ぐ坂月川、その坂月川が形成した谷津の最奥部右岸の台地上に遺跡は位置しており、坂月川と台地上の比高差は約18mを測る。

縄文時代の貝塚は全国に約2,410か所あるとされ、そのうちの約3割近くが千葉県に所在しているという。加曽利貝塚の周辺にも大規模で、学史的な縄文時代の貝塚が数多く存在している（第1図）。

加曽利貝塚の存在は、いまから約130年前の1887年に初めて学界に紹介されており（上田1887）、その後、多くの研究者によって調査・研究がなされてきた（第2表）。加曽利貝塚における調査・研究の歴史は、まさに日本考古学における調査・研究の歴史、そして、文化財保護の歴史である、と言っても過言ではなからう。加曽利貝塚を取り巻く調査・研究の歴史については、近年刊行された『史跡 加曽利貝塚 総括報告書』（西野ほか（編）



第1図 加曾利貝塚とその周辺の遺跡

2017)をはじめ、先学の諸成果（鈴木2020, 堀越2015・2017・2018, 村田2013など）を参照されたい。

加曾利貝塚の数ある諸特徴の中で、特に興味深く、また本稿との関連で重要なのは、主たる時期の異なる二つの大規模貝層（北貝塚・南貝塚）が接触して8の字状を呈していることである（第2図）。

北貝塚の堤状貝層は、主に縄文時代中期後半の加曾利E式期の間に形成され、その当時における北貝塚の形状は北東側が開口する馬蹄形を呈していた可能性が高いという。この開口部では阿玉台式期～加曾利EⅢ式期にかけての竪穴住居跡が重複するほか、堀之内1式期の竪穴住居跡も複数存在する。この堀之内1式期の竪穴住居が廃絶された後に、貝層によって開口部が塞がり、縄文時代後期後半以降に環状を呈する堤状貝層となったとされる（西野ほか（編）2017）。

一方、南貝塚の堤状貝層は、北貝塚に遅れて形成されており、堀之内1式期には形成が開始され、加曾利B2式期～加曾利B3式期に最も顕著であり、安行1式期ま

で継続する可能性が指摘されている。貝層形成以前には阿玉台式期～加曾利E式期にかけての竪穴住居跡などが散見され、称名寺式期～堀之内1式期の竪穴住居跡は貝層外縁部に、加曾利B式期～晩期前葉の居住痕跡は貝層の堤が最も高い辺りから貝層の内縁部にかけて構築される傾向があるという（西野ほか（編）2017）。

近年、こうした加曾利貝塚における貝層の形成・中断・終焉、そして居住・生業活動の変遷について、大規模津波などの自然災害も含めた環境変動を踏まえつつ、海洋適応の人類史的枠組みの中で捉え直そうとする論考が示された（鈴木2020）。また、加曾利貝塚の構造や形成過程をより詳細に復元・解明するため、平成29年度から継続的に発掘調査が実施されており、新たな調査・研究の成果が期待される。130年以上もの調査・研究の歴史があり、その間、先学による多大な研究成果の蓄積があるにも関わらず、加曾利貝塚の学術的重要性は、いまなお全く失われていないのである。



第2図 加曽利貝塚全体図（西野ほか（編）2017, 1-18図を転載）

3. 玉泉館旧蔵の加曽利貝塚資料

玉泉館旧蔵資料として九州大学総合研究博物館に収蔵されている加曽利貝塚資料は、土器56点である（第3図～第6図，第1表）。縄文時代中期の資料（第3図～第5図12）と，後期の資料（第6図）に大別できるが，量的には中期の資料のほうが多い。

第3図1は，内湾する口縁部で，口唇部上面には沈線

が1条施される。口縁部外面には幅6～7mm程度の隆帯を波状に横走させる。隆帯より下に縄文が施文されるが，上部には施されない。口縁部下端には縄文を切るように横走沈線が確認できる。土器の断面や沈線内などに貝殻の小片が多数付着していることから，当該土器が貝殻を含む堆積土層中に埋没していたことが窺える。加曽利EⅠ式新段階～加曽利EⅡ式古段階に属する資料であると考えられる²。

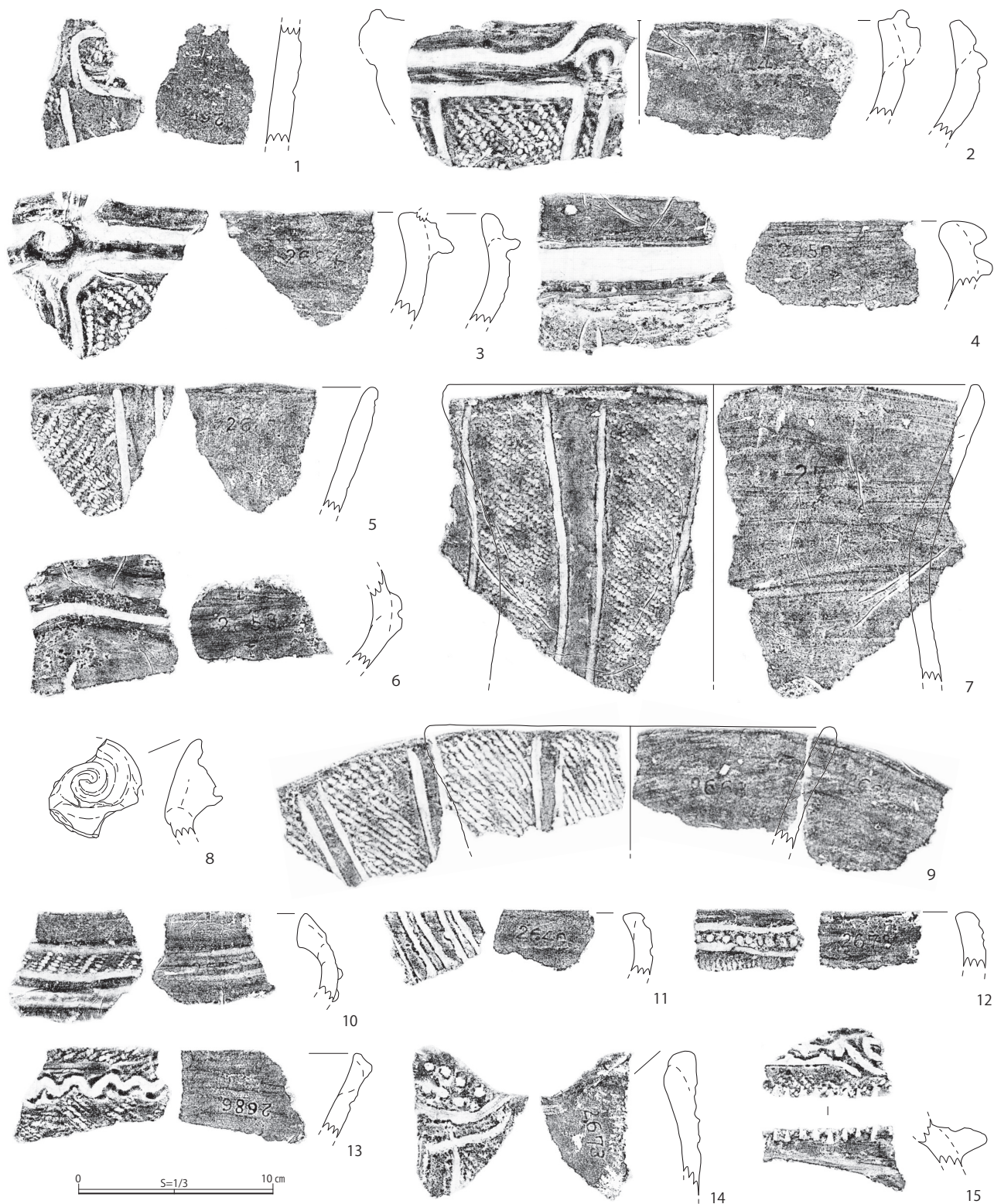


第3図 玉泉館旧蔵加曾利貝塚 土器資料①

第3図2～第4図1は、内湾する口縁部で、外面に渦巻状のモチーフを有するものである。第3図2～4は、口縁端部がやや肥厚している。文様は隆帯によって描かれており、隆帯の周りに沿って沈線や凹線が施されるため、立体的な印象が強まる。なお、第3図9と第4図1は隆帯ではなく沈線のみで描かれている。観察可能なものは、すべて縄文施文を切って沈線や凹線が描かれている。第3図3・4・9は、土器の断面や沈線内などに貝

の小片が付着している。頸部無文帯の有無や、胴部文様の状況がわからないため、時期の特定が難しい個体もあるが、概ね加曾利EⅢ式古段階に属する資料であろう³。第3図9と第4図1はこれらのなかでも新出の可能性はある。

第4図2・3は接合しないものの、同一個体の土器だと考えられる。内湾する口縁部で、外面上方に横走する1条の隆帯を施す。口縁部上端に渦巻状モチーフの低い



第4図 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料②

突起を有しており、その突起を起点にして縦位に並行する2条の沈線が描かれる。横走る隆帯より下には縄文が施文されている。土器の断面や沈線内などに貝殻の小片が付着している。加曽利EⅠ式新段階に属すると思

われるが、加曽利EⅡ古段階まで新しくなる可能性もある。

4は、口縁部が内湾して立ち上がり、その外面には横走る2条の隆帯が施されており、隆帯間は凹線状になっ

ている。土器の断面に貝殻の小片が付着する。文様モチーフなどの諸情報が欠落しており、所属時期の判断は難しいが、加曽利E式前半に属する資料か。

5・7・9は同様の特徴を有する。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部文様帯をもたない。頸部はくびれて、胴部は緩やかに膨らむことが7の土器から窺える。文様は懸垂文をモチーフとし、磨消縄文が施される。加曽利EⅢ式に属すると考えられるが、7は懸垂文の無文部分の幅が比較的広く、加曽利EⅢ式の中でも新しい段階に位置づけられる可能性がある。

6は、破片のため判断は難しいが、口縁部片だと考えられる。幅1.5cm程度の隆帯を波状に横走させ、同様に、隆帯の真ん中に波状の横走沈線を描く。土器の断面に貝殻の小片が付着する。加曽利E式に属すると考えるが、時期の特定は困難である。

8は、渦巻文を施した口縁部突起である。第4図2・3と比較すると、渦巻文もしっかりと描かれており、形も立体的である。加曽利EⅠ式新段階に属すると考えられるが、加曽利EⅡ古段階まで新しくなる可能性も排除できない。

10は、内湾する口縁部で、口縁端部を肥厚させ三角形の形態をなす。口縁端部内面は面取りされており、丁寧に横ナデ調整する。口縁部外面には幅5mm程度の隆帯を2条横走させる。時期の特定は困難であるが、加曽利EⅠ式～EⅡ式ごろの所産か。

11は、内湾口縁の破片で、口縁部外面に右下がりの斜向沈線を施す。小片のため判断が難しいが、加曽利EⅢ式ごろに併行する曾利式系の土器だと考えられる⁴。肉眼観察ではあるが、胎土などにおいて他の土器と差異は認められず、搬入品とは考え難い。

12は、緩やかに内湾する口縁部の破片で、口縁部外面に2条の横走沈線と、その間に円形の連続刺突文が施される。下端には縦位方向に施された縄文か条線かが確認できるが、残りが悪く、縄文か条線かを特定することは難しい。いわゆる連弧文土器に同様の特徴を有するものがあるが、詳細は不明である。

13は、外傾して開く口縁部の破片で、横走する波状文を沈線に描く。口縁端部はやや肥厚し、口唇部は面取りされており、縄文施文がなされている。時期の特定は難しい。

14は、内湾する平縁の突起部分だと考えられる。突起

外面には円形刺突文が複数施されており、その下部は並行する2条の沈線が半円形状にめぐっている。縦位の沈線が配され、無文部と縄文施文部を分ける。加曽利EⅠ式新段階か。

15は、小片のため器形の全体像がつかめない。断面三角形の突出した隆帯がめぐり、隆帯の端部には刻みが施されている。隆帯上面には沈線と刺突、そして縄文により文様が施されているが、モチーフは不明。縄文時代中期中頃の所産か。

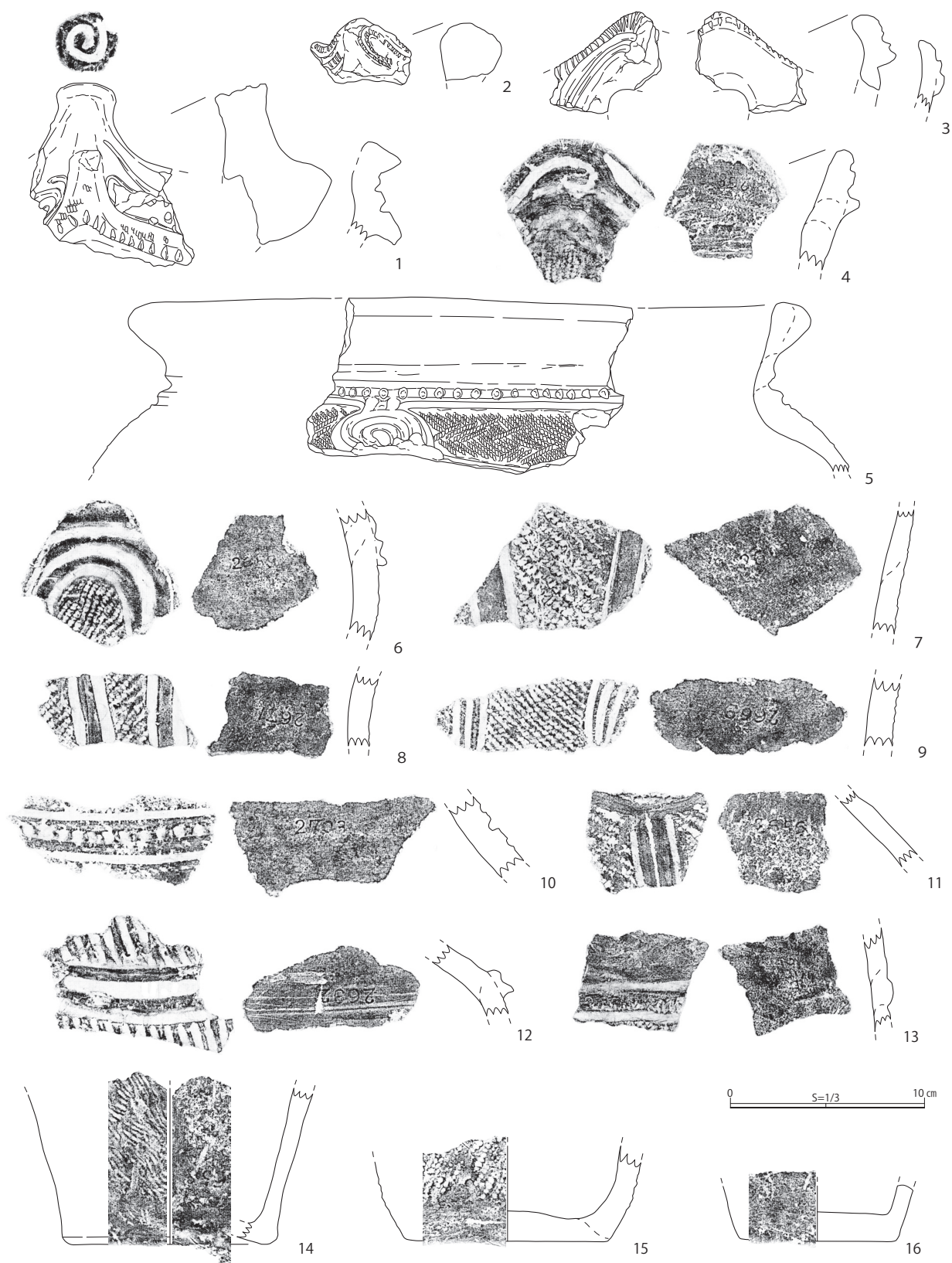
第5図1は、波状口縁の波頂部における突起部分である。破面の観察より、棒状の粘土紐を軸にして突起を成形していることがわかる。突起上面には渦巻文が描かれている。突起の両側には楕円形区画文が口縁に沿って描かれており、その内部には円形刺突文が複数施される。胎土に金雲母を含むが、他の出土土器と比較して目立つほどではない。縄文時代中期中頃の所産か。

2・3は、器種の特定は難しいものの、波状口縁の波頂部における突起部分である。左右非対称に突出する突起に、沈線と刻目で装飾する特徴は両者ともに類似している。3は波長部下に直径2cm程度の円形の穿孔がなされるが、2には見られない。また、3に比べて2の突起のほうが立体的である。いずれも縄文時代中期中頃の所産か。

4は、波状口縁の波頂部で、隆帯により区画した口縁部文様帯に渦巻文をモチーフとした文様を描く。波頂部側面の一方にのみ幅7mm程度の凹線が施される。栃木県寺野東遺跡出土資料（江原（編）1999, p.382 第335図-6）が当該資料の類例と考えられる。加曽利EⅠ式の新しい段階に属する資料か。

5は、鉢形土器である。口縁部は外傾して短く立ち上がり、胴部は強く張り出すと推定される。口縁端部は外面に粘土を付加して肥厚させている。頸部と胴部の境界には円形刺突文を連続して施し、胴部には5mm程度の隆帯で渦巻状のモチーフを描く。胴部の縄文は斜行方向を上下で違えるように施されており、羽状縄文のような様相を呈する。断面や円形刺突内に貝殻の小片が付着しており、埋没環境を反映したのと考えられる。加曽利EⅠ式新段階から加曽利EⅡ式に属するものか。

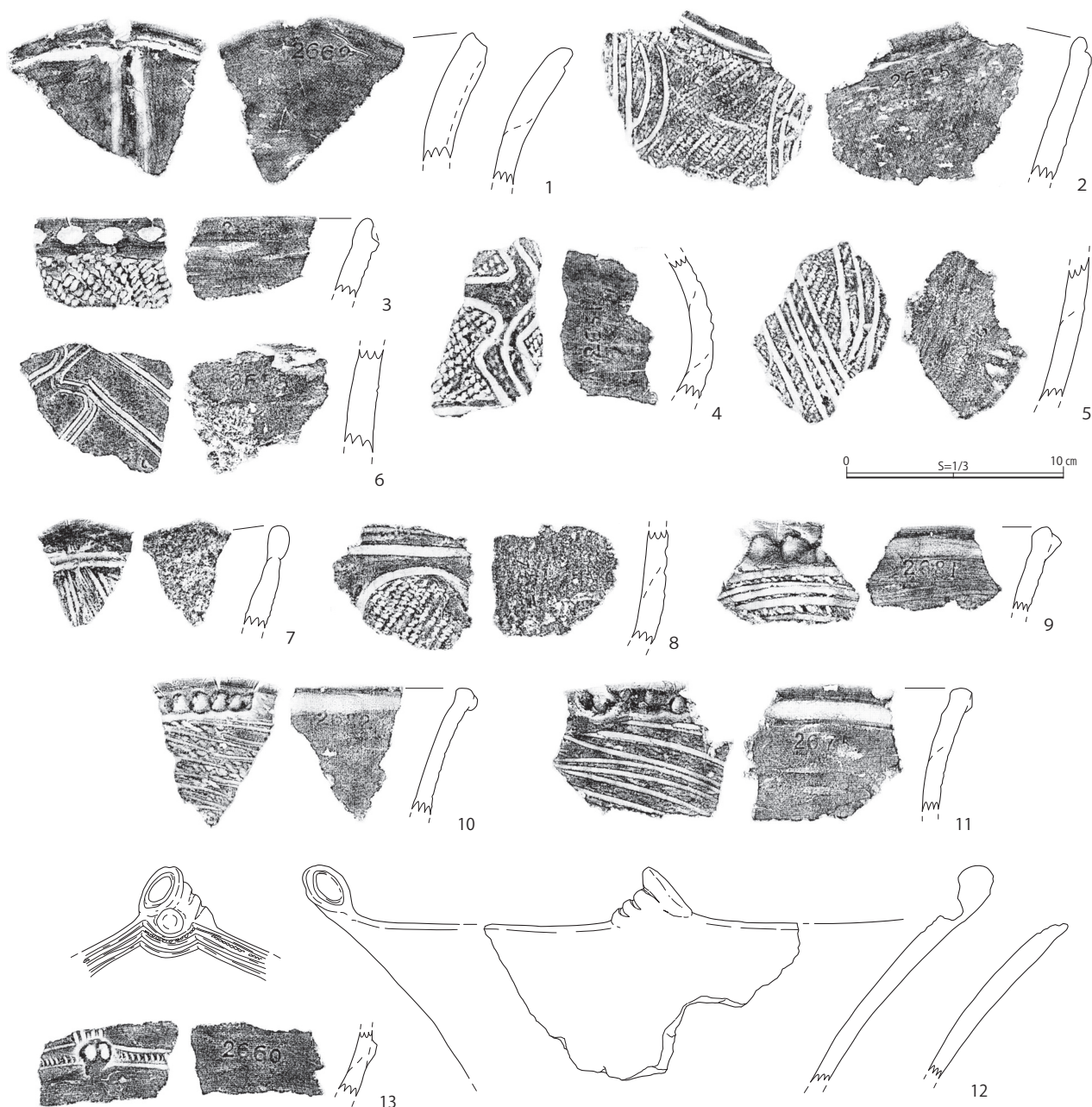
6は、幅5～8mm程度の隆帯3条で円形モチーフを描いた胴部片である。大木系土器群の影響を受けた可能性もあるが、詳細は不明である。



第5図 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料③

7～9は、懸垂文をモチーフとして描いた胴部片である。7・8は2条、9は3条の縦方向に並行する沈線を

施す。7・8は磨消縄文が施される。加曽利EⅢ式古段階に属すると考えられ⁵、3条沈線を施す9は、加曽利E



第6図 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料④

Ⅲ式新段階まで新しくなる可能性がある。

10は、3条の横走沈線を施し、そのうち真ん中の沈線内に連続して円形刺突を施している。時期の特定は難しい。

11は、縦位に並行する3条の沈線を描き、磨消縄文を施している。調整や土器断面などの観察から傾きを復元したものの、小片のため決め手に欠ける。文様モチーフから考えれば、加曽利EⅢ式に属すると考えられる。

12は、地文に条線を施す胴部片で、幅2cm程度の突帯が1条横走する。突帯上面には幅1cm程度の凹線が施されている。断面には貝殻の小片が付着する。曾利式系土

器か。

13は、幅1.5cm程度の隆帯が横走し、その下部には縄文が施文される。調整や土器断面などの観察から破片の天地や傾きを復元したものの、情報が少なく決め手に欠ける。時期の特定は困難である。

14～16は底部で、14は凹底、15・16は平底を呈する。14・15は外面に縄文が施文されるが、16は施文されない。また、16の破面は擬口縁状になっている。

第6図1は、波状口縁の波頂部で、やや外反しながら立ち上がる器形を呈する。波頂部の口唇部には凹点が施

玉泉館旧蔵の加曾利貝塚縄文土器資料

第 1 表 玉泉館旧蔵加曾利貝塚 土器資料観察表

図版 番号	挿図 番号	登録番号	器種	部位	時期	胎土	調整		色調	
							外面	内面	外面	内面
第3図	1	玉泉館2701	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式新段階～ E II 式古段階	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	ナデ、RL（縄文 →沈線）	横ナデ	7.5YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰
第3図	2	玉泉館2698	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm以下の白色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	横ミガキ、RL （縄文→沈線）	ミガキ	7.5YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐
第3図	3	玉泉館2706	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm以下の白色砂粒を含む	横ミガキ、LR （縄文→沈線）	粗い横ミガキ	7.5YR5/2灰褐	5YR5/4にぶい赤褐
第3図	4	玉泉館2667	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	横ミガキ、ナ デ、LR（縄文→ 沈線）	横ミガキ	10YR5/2灰黄褐	10YR4/1褐灰
第3図	5	玉泉館2696・ 2699	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm以下の白透色砂粒を含 む、角閃石を含む	ミガキ、LR	横ミガキ	5YR4/1褐灰	5YR3/2暗赤褐
第3図	6	玉泉館2687	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	ミガキ、RL	ナデ	7.5YR4/1褐灰	7.5YR4/3褐
第3図	7	玉泉館2668	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	横ミガキ、LR （縄文→沈線）	粗い横ミガキ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR5/3にぶい褐
第3図	8	玉泉館2680	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、LR	横ミガキ	7.5YR4/2灰褐	10YR5/4にぶい黄褐
第3図	9	玉泉館2693	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	丁寧なナデ	横ミガキ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y3/1黒褐
第3図	10	玉泉館2690	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ	横ナデ	5YR4/2灰褐	5YR4/6赤褐
第3図	11	玉泉館2666	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白色砂粒を含む	ミガキ、RL（縄 文→沈線）	横ミガキ	7.5YR5/3にぶい褐	10YR3/1黒褐
第3図	12	玉泉館2685	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	横ナデ、LR	横ナデ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/3にぶい褐
第4図	1	玉泉館2670	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、RL	ナデ	10YR4/1褐灰	7.5YR5/4にぶい褐
第4図	2	玉泉館2704	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式新段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、RL（縄文 →沈線）	横ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰
第4図	3	玉泉館2684	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式新段階	0.5mm以下の白色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	ナデ、RL（縄文 →沈線）	横ナデ	10YR5/1褐灰	10YR5/2灰黄褐
第4図	4	玉泉館2650	深鉢	口縁部	加曾利 E 式前半期	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	横ナデ	横ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/1褐灰
第4図	5	玉泉館2688	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む、角閃石を少量含む	磨消縄文（LR）	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰
第4図	6	玉泉館2653	深鉢	口縁部	加曾利 E 式	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む、金雲母を少量含む	ナデ	横ミガキ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙
第4図	7	玉泉館2700	深鉢	口縁～胴部	加曾利 E III 式	0.5mm程度の白色砂粒を含む	磨消縄文（RL）	粗い横ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐
第4図	8	玉泉館2661	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式新段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、ミガキ	ミガキ	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/3にぶい褐
第4図	9	玉泉館2663・ 2665	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	磨消縄文（R）	粗い横ミガキ	7.5YR4/1褐灰	7.5YR4/2灰褐
第4図	10	玉泉館2679	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式～E II 式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、LR	横ナデ	7.5YR3/2黒褐	7.5YR4/2灰褐
第4図	11	玉泉館2649	深鉢	口縁部	加曾利 E III 式併行期	0.5mm程度の白色砂粒を含む	ナデ	横ミガキ	2.5Y5/1黄灰	10YR3/1黒褐
第4図	12	玉泉館2678	深鉢	口縁部	加曾利 E 式期	0.5mm程度の白色砂粒を含む	ナデ、縄文？	横ナデ	10YR4/1褐灰	7.5YR4/2灰褐
第4図	13	玉泉館2686	深鉢	口縁部	縄文中期後半？	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	ナデ、RL？	粗い横ミガキ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y3/1黒褐
第4図	14	玉泉館2673	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式新段階？	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	ナデ、RL？	ナデ	7.5YR4/1褐灰	7.5YR4/2
第4図	15	玉泉館2657	深鉢？	口縁部？	縄文中期中頃	0.5mm程度の白透色砂粒を含 む、金雲母を含む	ナデ、RL？	丁寧な横ナデ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR4/1褐灰
第5図	1	玉泉館2697	深鉢	口縁部	縄文中期中頃	0.5mm程度の白透色砂粒を含 む、金雲母を含む	ナデ、ミガキ、 縄文	ミガキ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR3/1黒褐
第5図	2	玉泉館2691	深鉢？	口縁部	縄文中期中頃	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐
第5図	3	玉泉館2677	深鉢？	口縁部	縄文中期中頃	0.5mm程度の白透色砂粒を含 む、金雲母を含む	ナデ	丁寧なナデ	7.5YR5/2灰褐	10YR4/1褐灰
第5図	4	玉泉館2683	深鉢	口縁部	加曾利 E I 式	0.5mm以下の白色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	ナデ、縄文	横ケズリ	10YR5/1褐灰	10YR5/2灰黄褐
第5図	5	玉泉館2694	鉢	口縁～胴部	加曾利 E I 式新段階～ 加曾利 E II 式	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む	横ミガキ、RL	粗い横ミガキ	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/1褐灰
第5図	6	玉泉館2659	深鉢	口縁部？	加曾利 E 式後半期？	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む、金雲母をやや多く含む	ナデ、LR	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰
第5図	7	玉泉館2652	深鉢	胴部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm程度の白透色砂粒を含 む、角閃石を含む	磨消縄文（RL）	ナデ	7.5YR4/1褐灰	10YR5/3にぶい黄褐
第5図	8	玉泉館2671	深鉢	胴部	加曾利 E III 式古段階	0.5mm以下の白色砂粒を含む	磨消縄文（LR）	ナデ	7.5YR4/2灰褐	10YR5/3にぶい黄褐
第5図	9	玉泉館2669	深鉢	胴部	加曾利 E III 式新段階	0.5mm以下の白色砂粒を含む	磨消縄文（RL）	粗い横ミガキ	7.5YR5/3にぶい褐	5YR5/4にぶい赤褐
第5図	10	玉泉館2703	鉢？	胴部	加曾利 E 式期？	0.5mm程度の白色砂粒を含む	ナデ	丁寧な横ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR4/4褐
第5図	11	玉泉館2656	鉢？	胴部	加曾利 E III 式期？	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	磨消縄文（RL）	ナデ		
第5図	12	玉泉館2679	鉢？	胴部	加曾利 E 式期？	0.5mm程度の白透色砂粒を含 む、金雲母をやや多く含む	ナデ	横ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐
第5図	13	玉泉館2674	深鉢	胴部	加曾利 E 式期？	0.5～1mm程度の白透色砂粒を 含む、角閃石を少量含む	横ミガキ、縄 文？	横ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐

第 1 表 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料観察表

図版 番号	挿図 番号	登録番号	器種	部位	時期	胎土	調整		色調	
							外面	内面	外面	内面
第5図	14	玉泉館2658	深鉢	底部	時期特定不可	0.5mm程度の白色砂粒を含む	R	ナデ	5YR4/2灰褐	10YR4/1褐灰
第5図	15	玉泉館2702	深鉢	底部	時期特定不可	0.5mm程度の白色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	LR	ナデ	7.5YR4/4褐	2.5Y3/1黒褐
第5図	16	玉泉館2707	深鉢	底部	時期特定不可	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	丁寧なナデ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/2灰黄褐
第6図	1	玉泉館2662	深鉢	口縁部	堀之内 1 式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む	粗いミガキ	横ミガキ	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐
第6図	2	玉泉館2695	深鉢	口縁部	堀之内 1 式	0.5mm以下の白色砂粒を含む	LR（縄文→沈線）	横ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/2灰黄褐
第6図	3	玉泉館2664	深鉢	口縁部	縄文後期前半期	0.5mm程度の白透色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	横ミガキ、RL	横ナデ	5YR4/2灰褐	5YR4/4にぶい赤褐
第6図	4	玉泉館2651	深鉢	胴部	堀之内 1 式	0.5mm程度の白色砂粒を含む	ナデ、LR	横ミガキ	7.5YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰
第6図	5	玉泉館2672	深鉢	胴部	堀之内 1 式	0.5～1mm程度の白透色砂粒を含む	LR（縄文→沈線）	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR3/2黒褐
第6図	6	玉泉館2655	深鉢	胴部	堀之内 1 式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む、 角閃石を含む	ナデ	横ミガキ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR3/3暗褐
第6図	7	玉泉館2676	深鉢	口縁部	加曽利 B 3 式	0.5mm程度の白色砂粒を含む	粗いミガキ	ナデ	2.5Y3/1黒褐	2.5Y5/1黄灰
第6図	8	玉泉館2654	深鉢	胴部	加曽利 B 3 式	0.5～1mm程度の白透色砂粒を含む	ナデ、LR（縄文→沈線）	ナデ	7.5YR4/1褐灰	7.5YR5/4にぶい褐
第6図	9	玉泉館2681	深鉢	口縁部	加曽利 B 2 式～B 3 式	0.5mm以下の白色砂粒を含む、 角閃石を少量含む	条線、縄文	横ナデ	10YR3/1黒褐	7.5YR3/1黒褐黒褐
第6図	10	玉泉館2682	深鉢	口縁部	加曽利 B 2 式～B 3 式	0.5mm以下の白色砂粒を含む、 角閃石を含む	条線、縄文	横ナデ	7.5YR4/1褐灰	7.5YR3/1黒褐
第6図	11	玉泉館2675	深鉢	口縁部	加曽利 B 2 式～B 3 式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む、 角閃石を含む	条線	横ミガキ	10YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰
第6図	12	玉泉館2705	浅鉢	口縁～胴部	堀之内 2 式～加曽利 B 1 式	0.5mm程度の白色砂粒を含む	横ミガキ	ミガキ	2.5Y4/1黄灰	10YR4/1褐灰
第6図	13	玉泉館2660	深鉢	頸部	安行 2 式	0.5mm程度の白色砂粒を含む	横ナデ	横ナデ	5YR4/2灰褐	5YR5/4にぶい赤褐

され、その下には縦位の隆帯が施される。口縁端部外面には、波状口縁に沿って沈線が 1 条めぐり、

2 は、バケツ形の器形を呈する土器であろう。口縁は波状をなし、口縁端部外面には口縁に沿って沈線が 1 条描かれる。縄文を地文とし、その上から沈線で文様を描き、沈線間の縄文を磨り消す部分も確認できる。

1・2 はともに堀之内 1 式に比定できよう。

3 は、外傾して開く口縁部の破片である。口縁端部外面に無文帯を作出し、楕円形を呈する凹点を連続して施す。無文帯以下は縄文が施文されている。縄文時代後期前半期の所産であろう。

4～6 は、堀之内 1 式に属すると考えられる胴部片である。4 の文様モチーフは不明であるが、沈線間の縄文は磨り消されている。5 は、数条の沈線を一単位として文様モチーフを描く。6 は、半裁竹簡を施文具とした 2 条一単位の沈線で文様モチーフが描かれている。

7 は、波状口縁の波頂部である。口縁に沿って沈線がめぐり、その下に条線が施される。加曽利 B 3 式に属すると考えられる。

8 は、加曽利 B 3 式に属すると考えられる胴部片である。2 条の横走沈線を配し、その下に縄文を施した円形モチーフの文様が描かれる。おそらく弧線文をモチーフとしたものと推察される。

9～11 は、いわゆる紐線文土器である。紐線文のあり方や外反して立ち上がる口縁部の器形などから判断して、加曽利 B 2 式～加曽利 B 3 式に属するものと考えられよう。

12 は、内面施文の浅鉢である。波状口縁を呈し、波頂部には左右非対称な突起を有する。口縁部内面には、口縁に沿って 3 条の沈線がめぐり、そのうち上から 1 番目と 2 番目の沈線間には縄文が施文される。波頂部突起の形状は加曽利 B 1 式の特徴を有しているが、口縁部形態は堀之内 2 式的である。共伴資料が把握できない現状では、時期の絞り込みは難しい。

13 は、豚鼻状の貼付文が施文され、その上方には縦位の沈線が数条施され、また、その両側には 2 条の横走沈線がめぐり、横走沈線間には刻目が連続して施される。安行 2 式の所産であろうか。

4. 当該資料の位置づけ

玉泉館旧蔵の加曽利貝塚土器資料 56 点のうち、半数以上は縄文時代中期、特に加曽利 E 式土器に比定される資料であった。その他、加曽利 E 式以前の縄文時代中期中葉の土器や、縄文時代後期の堀之内 1 式、加曽利 B 2 式・

B3式、安行2式に比定される土器を確認できる。

また、土器の断面や沈線・刺突の内部に貝殻の薄片が付着している資料を確認できることは興味深い。これは、元々、当該資料が貝殻を含む堆積土層中に埋没していたことを物語っている。こうした貝殻付着資料は、縄文時代中期の加曽利E式土器に目立ち、縄文時代後期の土器資料では確認できない。後世における遺物の洗浄を含む整理作業の詳細がわからない以上、どれほど積極的に評価してよいものか悩ましいが、貝殻付着の有無が資料の埋没環境の差異を表している可能性が高いことを指摘しておきたい。

以上のような資料状況を踏まえたとき、加曽利貝塚が主たる時期の異なる二つの大規模貝層（北貝塚・南貝塚）

によって構成されていることは注目に値する（第2図）。

北貝塚は、縄文時代中期後半の加曽利E式期に、北東部が開口する馬蹄形状に貝層が形成され、その後、堀之内1式期の貝層形成によって開口部が塞がり、縄文時代後期後半以降には環状を呈する堤状貝層が形成されたことがわかっている。一方、南貝塚は、縄文時代後期前葉の堀之内1式期には貝層の形成が開始され、加曽利B2式期～加曽利B3式期に最も顕著であり、安行1式期まで継続した可能性が指摘されている。

こうした北貝塚と南貝塚における貝層形成の時期差は、玉泉館旧蔵の加曽利貝塚土器資料の来歴を考えるうえで重要である。玉泉館旧蔵資料の多くが加曽利E式期のものであり、かつ、それらの中に、貝層から出土したこと

第2表 加曽利貝塚 保存・整備以前の調査（西野ほか（編）2017、2-1表を転載）

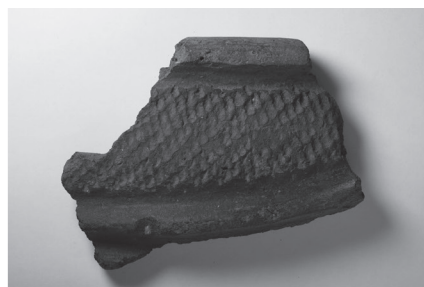
調査主体	地点名称	調査年	年号	調査地点	備考・参加者
東京人類学会	遠足会1907地点	1907	明治40		坪井正五郎・大野雲外・石田収蔵・江見水蔭・水谷幻花
東京帝国大学人類学教室	人類1907地点	1907	明治40		坪井正五郎・石田収蔵・松村瞭
個人	江見1908地点	1908	明治41		江見水蔭
東京人類学会	人類学会遠足会1915地点	1915	大正04		上羽貞幸・長谷部言人・小金井良精・江見水蔭・石田収蔵
個人	大山1922地点	1922	大正11	南貝塚・B地点	A・B・C・D地点測量。大山柏
個人	上羽1923地点	1923	大正12		上羽貞幸
個人	上羽1924地点	1924	大正13		上羽貞幸
東京帝国大学人類学教室	人類学会1924a地点	1924	大正13	北貝塚・D・E地点、南貝塚B地点	小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・山内清男・宮坂光次
東京帝国大学人類学教室	人類学会1924b地点	1924	大正13		小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・宮坂光次
汎太平洋学術会議	学術会議1925地点	1925	大正14		汎太平洋学術会議。小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・宮坂光次
史前学会	史前学会1928地点	1928	昭和3	南貝塚(A地点)	宮坂光次・池上啓介・竹下次作
第一早稲田高等学院史学部	早高1934地点	1934	昭和9	南貝塚(C地点?)	(加曽利古山貝塚) 西村真次・大宮守誠・武田宗久
第一早稲田高等学院史学部	早高1935地点	1935	昭和10		大宮守誠・武田宗久
第一早稲田高等学院史学部	早高1936地点	1936	昭和11	南貝塚・C地点	池上啓介・菊池義次
史前学会	史前学会遠足会1936地点	1936	昭和11	南貝塚・B地点	大山柏・竹下次作・池上啓介・大給尹・土岐仲男・大場磐雄
第一早稲田高等学院史学部	早高1937地点	1937	昭和12	B地点	藤澤宗平
個人	椎名1949地点	1949	昭和24		椎名仙卓
個人	國學院1949地点	1949	昭和24	北貝塚・D地点	椎名仙卓・麻生優
明治大学考古学研究室	明大1958地点	1958	昭和33	北貝塚・E地点周辺	杉原荘介・芹沢長介



第3図1



第3図2



第3図3



第3図4



第3図5



第3図6



第3図7



第3図8



第3図9



第3図10



第3図11



第3図12



第4図1

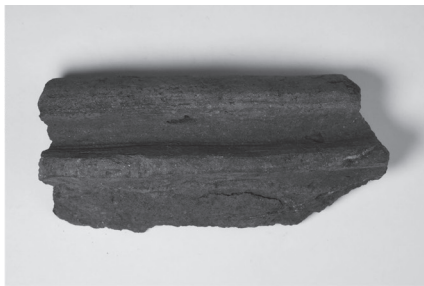


第4図2



第4図3

写真1 玉泉館旧蔵加曾利貝塚 土器資料①



第4図4



第4図5



第4図6



第4図7



第4図8



第4図9



第4図10



第4図11



第4図12



第4図13



第4図14



第4図15



第5図1

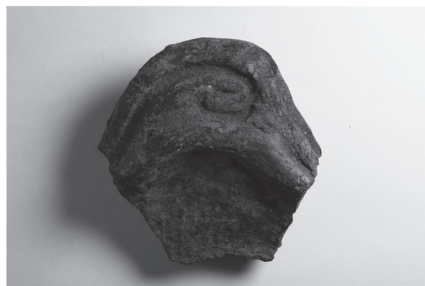


第5図2



第5図3

写真2 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料②



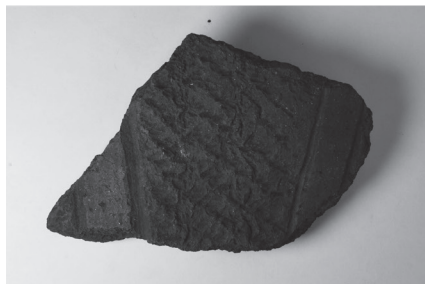
第5図4



第5図5



第5図6



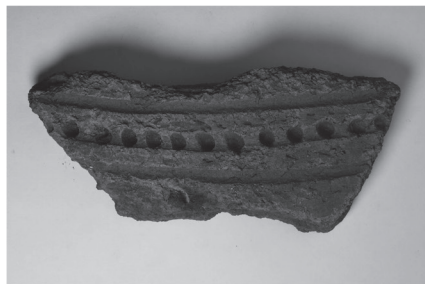
第5図7



第5図8



第5図9



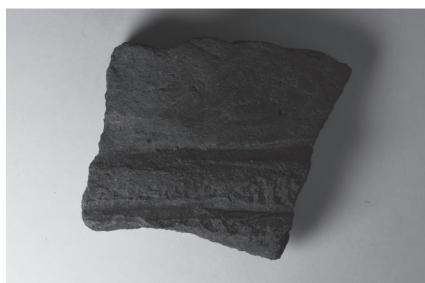
第5図10



第5図11



第5図12



第5図13



第5図14



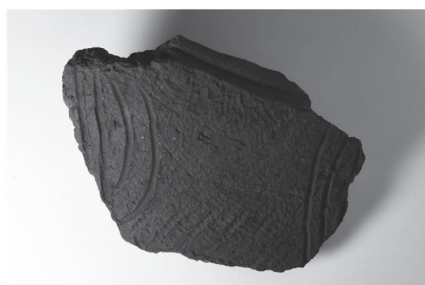
第5図15



第5図16



第6図1



第6図2

写真3 玉泉館旧蔵加曾利貝塚 土器資料③



第6図3



第6図4



第6図5



第6図6



第6図7



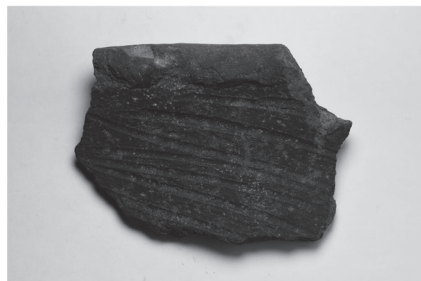
第6図8



第6図9



第6図10



第6図11



第6図12



第6図13

写真4 玉泉館旧蔵加曽利貝塚 土器資料④

を示唆する貝殻付着資料が一定数確認できることから、玉泉館旧蔵の加曽利貝塚土器資料は、北貝塚で出土あるいは採集された資料である可能性が浮上してくるのである⁶。

さて、玉泉館旧蔵資料は、旧制福岡高等学校教授の玉泉大梁氏〔1886-1971〕が、実物資料を重視する歴史・地理教育のために収集した資料である（小林1988，谷澤・岩永2021，玉泉1966・1972）。大正11（1922）年4月，旧制福岡高等学校の開校と同時に着任してから資料収集に着手し，大正14（1925）年には考古資料がだいぶ集

まったとされる。昭和5（1930）年には，収集資料を収蔵する資料室が建造され，「玉泉館」と呼ばれた。昭和14（1939）年には，玉泉館の東側に木造の新館も建造されたが，これは古文書陳列のために建造されたという。戦後になって玉泉氏が退官し，玉泉館の資料は，昭和24（1949）年に九州大学第一分校（後の教養部）に移管された。その後，1960年代まで玉泉館資料へのアクセスは閉鎖状態になっていたようである。

資料収集の具体的な方法等に関する詳細情報が不明なのは残念であるが，上記のような経緯からすると，資料

の収集は1922年から着手され、1930年代には概ね完了していたことが推察される。

玉泉館旧蔵の加曽利貝塚土器資料は、加曽利貝塚の北貝塚で出土あるいは採集された可能性があることは、先述のとおりである。第2表から北貝塚の調査歴を見ても、玉泉館旧蔵資料の収集が完了したと考えられる1930年代以前に行われた調査は、大正11（1922）年に大山柏氏によって実施された発掘調査と、大正13（1924）年に東京帝国大学人類学研究室によって実施された発掘調査が該当する。また大正4（1915）年に東京人類学会の第5回遠足会でも北貝塚が調査されているようだ（堀越2017）。玉泉氏はこれらの調査と何らかの関係性を有しており、そうした関係性の中で資料を入手した可能性がある。当時の調査記録の中に、遺跡来訪者や関係者などの情報が残されていれば、それらの検討から、玉泉館旧蔵加曽利貝塚資料の来歴について、さらに追究することができるかもしれない。今後の課題としたい。

一方、発掘調査とは関係なく、玉泉氏が加曽利貝塚を独自に踏査し、資料を採集・収集した可能性も当然想定しなければならない⁷。その場合、玉泉氏が北貝塚周辺を踏査して資料を採集した可能性を指摘することはできるが、それ以上の追究は極めて困難であるといえよう。

5. おわりに

九州大学総合研究博物館に所蔵されている玉泉館旧蔵資料のうち、加曽利貝塚の土器資料について紹介してきた。検討の結果、当該資料は加曽利貝塚の中でも北貝塚で出土あるいは採集されたものである可能性を指摘した。

玉泉館旧蔵資料に関しては、収集・採集の経緯などについての記録資料が十分に残されておらず、そのことが当該資料の分析・考察に制約を与えていることは残念である。しかし、そうであっても玉泉館旧蔵資料の学史的・学術的価値が失われるわけではないことは強調しておきたい。残された資料から如何に情報を抽出し、新たな事実を見出すことができるかどうかは、後学に残された重要な課題と言えよう。そのことを再度認識しつつ、まだ目の見ない多くの玉泉館旧蔵資料はもちろんのこと、本稿で報告した加曽利貝塚の土器資料についても、調査・研究を継続していく所存である。

謝辞

本稿をなすにあたり、中村耕作氏（国立歴史民俗博物館）、太田圭氏（東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設）、小川慶一郎氏（（公財）千葉県教育振興財団）には、土器資料の位置づけ・評価について多くのご指導をいただいた。末筆ではございますが、御礼申し上げます。

注

- 1 九州大学総合研究博物館データベース (<http://d B .mus E um.kyushu-u.ac.jp/jp/>)
- 2 加曽利E式土器の時間的変化に関してはおおそ研究者間で認識が一致しているものの、細分型式などの呼称に関しては研究者間で齟齬が見られる。本稿では、加曽利E式土器の時間的位置づけに関しては、基本的に（細田2008）で提示された編年案を参照するが、必要に応じて、その他の編年案との対比も明示することとする。当該土器に関していえば、（谷井ほか1982）の「X期」、（鈴木・山本1988）の「加曽利E第2様式」に相当すると考えられる。
- 3 （岡本1963；岡本・戸沢1965）の「加曽利EⅡ式」、（谷井ほか1982）の「XⅡa期」～「XⅡB期」、（鈴木・山本1988）の「加曽利E第3様式」に概ね相当しよう。
- 4 （谷井ほか1982）の「XⅡ期」に属する「4群土器」に相当すると考えられる。
- 5 （岡本1963；岡本・戸沢1965）の「加曽利EⅡ式」、（谷井ほか1982）の「XⅡa期」～「XⅡB期」、（鈴木・山本1988）の「加曽利E第3様式」に相当。
- 6 南貝塚において加曽利E式期の貝層は確認されていない。また、先述のとおり、北貝塚の北東部では堀之内1式期の貝層形成が確認されているものの（後藤1977；西野ほか（編）2017）、玉泉館旧蔵の堀之内1式土器（第6図1, 2, 4～6）では貝殻付着を確認できない。
- 7 旧制福岡高等学校在籍中、玉泉氏は、たびたび学生と共に遺跡の発掘・遺物の収集を行っていたようだ（玉泉1966）。

参考文献

- 飯塚義之・主税和賀子2021「九州大学総合研究博物館所蔵・玉泉館古代瓦資料の岩相学的研究」『九州大学総合研究博物館研究報告』18, 九州大学総合研究博物館, pp.15-37.
- 上田英吉1887「下総国千葉郡加瀬記」『東京人類学雑誌』2-19, 日本人類学会, pp.308-315.
- 江原英（編）1999『寺野東遺跡Ⅱ（縄文時代 土坑編-1）』栃木県埋蔵文化財調査報告第224集, 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 岡本勇1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告』7, 横須賀市博物館 pp.17-34.

- 岡本勇・戸沢充則1965「縄文文化の発展と地域性 関東」鎌木義昌（編）『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社，pp.97-132.
- 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1996「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（1）——九州縄文時代資料（1）——」『九州文化史研究所紀要』40，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.1-86.
- 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1997「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（2）——九州石器資料（1）——」『九州文化史研究所紀要』41，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.53-128.
- 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座1999「九州大学旧玉泉館収蔵考古資料（3）——関東縄文時代資料（1）——」『九州文化史研究所紀要』42・43合併号，九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室，pp.1-48.
- 後藤和民1977「加曾利北貝塚の貝層堆積」杉原荘介（編）『加曾利北貝塚』中央公論美術出版，pp.55-66.
- 小林茂1988「教養部玉泉館資料の移転について」『九大教養部報』93，九州大学教養部，pp.8-12.
- 鈴木正博2020「加曾利貝塚に学ぶ（序説）——山内清男「縄紋式文化の構造（横）と「環堤貝塚」の相互視線」——」『千葉縄文研究』10，千葉縄文研究会，pp.1-44.
- 鈴木保彦・山本暉久1988「加曾利E式土器様式」小林達雄・小川忠博『縄文土器大観2 中期Ⅰ』小学館，pp.325-329.
- 谷井彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田勝1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団，pp.1-137.
- 谷澤亜里・岩永省三2021「玉泉館旧蔵考古資料——近年の再整理を経ての資料紹介——」『九州大学総合研究博物館研究報告』18，九州大学総合研究博物館，pp.51-63.
- 玉泉大梁1966「玉泉館の記」『九大教養部報』18，九州大学教養部，p.3.
- 玉泉大梁1972「玉泉館のこと」清陵会（編）『清陵 思い出の記』清陵会，pp.6-11.
- 西野雅人・米倉貴之（編）2017『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会
- 福永将大2022「玉泉館旧蔵資料の研究——福岡県みやま市下楠田貝塚出土の土器資料について——」『九州大学総合研究博物館研究報告』19，九州大学総合研究博物館，pp.17-26.
- 細田勝2008「加曾利E式土器」小林達雄（編）『総覧 縄文土器』アム・プロモーション，pp.410-417.
- 堀越正行2015「千葉市の貝塚調査史と人骨」『千葉いまむかし』28，千葉市教育委員会，pp.9-62.
- 堀越正行2017「日本の貝塚研究における加曾利貝塚の位置と意義」『貝塚博物館紀要』43，千葉市加曾利貝塚博物館，pp.1-34.
- 堀越正行2018「日本列島の貝塚と加曾利貝塚」『貝塚博物館紀要』44，千葉市加曾利貝塚博物館，pp.11-35.
- 村田六郎太2013『日本の遺跡46 加曾利貝塚 東京湾東岸の大型環状貝塚』同成社

Received Jan. 5, 2023; accepted Jan. 6, 2023

Jomon Potteries from the Kasori shell mound in the *Gyokusen-kan* Collection

—Study II of archaeological materials in the *Gyokusen-kan* Collection—

Masahiro FUKUNAGA

The Kyushu University Museum

This paper reports on the Jomon pottery materials from the Kasori shell mound located in Chiba City, Chiba Prefecture, among the *Gyokusen-kan* Collection in the Kyushu University Museum. The Kasori shell mound is composed of two large shell middens (north and south shell middens) of different main periods. The results of the analysis of the pottery indicated that it may have been excavated or collected from the northern shell middens in Kasori shell mound, where the shell middens were formed mainly during the Kasori E type in the latter half of the Middle Jomon period.

Key words: the *Gyokusen-kan* Collection, report of materials, Kasori shell mound, pottery, Jomon period